基礎・基本を身に付け、表現する能力を高める英語科学習指導法の研究
～単位時間と単元における「教えて考えさせる」活動構成を通して～

要約

世界の経済、社会においては、グローバル化が一層進み、異なる文化や価値観をもつ人々との共存や国際協力の重要性が今まで以上に高まってきている。また、人工知能の発展が急速に進み、雇用の在り方、学校で身につけさせるべき能力についても大きな変化をもたらすのではないかとの予測も示されている。このような時代にあっては、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報の中から関係する情報を見出し、再構成するなどして新しいものを作り出していくことが求められる。

平成２８年度の中央教育審議会答申では、外国語科の指導について、次のことが指摘された。「外国語の学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である。」このことから、基礎・基本を身に付け、生徒の表現する能力を高めることは価値があるものとする。

そこで、本研究では、単位時間と単元における「教えて考えさせる」活動構成を通して基礎・基本と、英語で表現する能力の育成を図る。単位時間と単元における「教えて考えさせる」活動構成とは、東京大学大学院教授の市川伸一氏が提唱する「教えて考えさせる授業」をもとに、単位時間の学習活動と、単元の学習活動とを区別して構成する。２つの「教えて考えさせる」活動構成を組み合わせることで、基礎・基本の定着と表現する能力を高めていきたいと考えた。

①「教えて考えさせる」授業 単位時間を「説明」「確認」「深化」「評価」の４つの学習過程で構成し、基礎・基本の理解を深めていく。 ②「教えて考えさせる」単元構成 「教えて考えさせる」授業を、単元の「教える」活動として、また、新言語材料を用いた言語活動を「考えさせる」活動と位置付け、単元全体を構成していく。

実践に取り組んだ結果、以下のような成果（○）と課題（●）が明らかになった。

○　単位時間と単元における「教えて考えさせる」活動構成において、思考・判断・表現を繰り返すことを通じて理解が深まり、基礎・基本となる語彙および文法を身に付けられた。

○　単位時間の「教えて考えさせる」授業で身に付けた文法や語彙を使って言語活動を仕組み、単元のまとめにつなげていったことは、生徒の表現する意欲や能力を高めることにつながった。

●　単位時間の「教えて考えさせる」授業では、時間が足りなかったため、授業のまとめや自己評価の時間が十分に確保できなかった。

●　英作文の活動において、付加修正の仕方を工夫する必要がある。

キーワード　「教えて考えさせる」活動構成　　基礎・基本　　表現する能力

１　主題設定の理由

（１）社会の動向から

世界の経済、社会においては、グローバル化が一層進み、異なる文化や価値観をもつ人々との共存や国際協力の重要性が今まで以上に高まってきている。また、人工知能の発展が急速に進み、雇用の在り方、学校で身につけさせるべき能力についても大きな変化をもたらすのではないかとの予測も示されている。このような時代にあっては、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報の中から関係する情報を見出し、再構成するなどして新しいものを作り出していくことが求められる。

（２）求められる英語科学指導の面から

中央教育審議会答申（平成２８年１２月）では、外国語科の指導について、次のことが指摘された。「外国語の学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である。」また、言語材料と言語活動、言語の働き等を効果的に関連付け、総合的に組み合わせて指導するとともに、この構成の中で、深い学びの実現に向けた授業改善を推進することが求められている。

（３）生徒の実態から

年度当初に実施したアンケートでは、「英語が分かりますか」という質問に対して、３割の生徒が「あまり」または「まったく」と回答した。その理由として、６０％が「単語・熟語を覚えられない」、４０％が「文法がわからない」と回答した。また、４月に実施した標準学力検査の観点別評価基準を見ると、「外国語表現の能力」の達成状況が、３段階評価でＡ評価の生徒が３％、Ｃ評価の生徒の割合が７８％であった。このことから、特に活用することに課題があると分かった。

（４）これまでの自身の指導の反省から

これまでの自分自身の授業を振り返ってみると、次のような課題があった。教科書の本文にある文法や語彙を理解させることに重点を置いており、目的や場面、状況に応じて表現したり伝え合ったりするような活動を取り入れることが少なかった。そのことにより、自ら表現したいという意識をもたせることが不十分であった。

以上のことから、言語活動を行う中で、文法や語彙についての基礎的・基本的な知識を身に付け、実際の場面を想定した中で、生徒の意欲を高めながら適切な語彙や文法を運用する場面を設定することで、生徒の表現する能力を育成するような指導が必要であると考えた。

２　研究主題・副題の意味

（１）「基礎・基本」とは

中学校英語科の学習においては、コミュニケーション能力の基礎を養うことを目標としており、「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」の４技能を用いた基礎的な言語活動をバランスよく、計画的・系統的に行うことが大切である。

この言語活動では、情報や事実を伝えるにとどまらず、互いの考えや気持ちなどを伝

え合うことが必要なため、言語活動を一層活性化させるためには、語彙と文法とを確実に身に付け、適切に用いることが大切である。

考えや気持ちなどを相手に正確に伝えたり、理解したりするために必要な語彙や文法を、本研究における基礎・基本とする。これらを身に付けることで、生徒は、目的や場面、状況に応じて、表現したりすることができるようになると考える。

（２）「表現する能力」とは

表現する能力とは、英語を使って事実や、自分の気持ちや考えを伝えることができる力である。具体的には、次の２つのことをできるようになる必要がある。

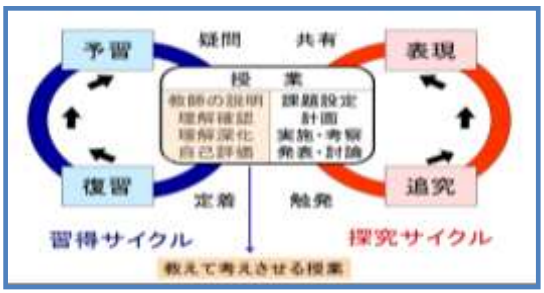
・情報を整理しながら自分の考えを形成すること
・語彙、文法を用いて、自分の伝えたい内容を英語で表現すること

情報を整理しながら自分の考えなどを形成するためには、目的や場面、状況などを考慮して、「何を」「どのように」伝えれば相手に考えや情報が伝わるのかを考え、組み立てなければならない。特に、英語の学習においては、表現する知識や技能を十分に持ちあわせていないので、日常会話や生活の中で用いている日本語と異なり、伝えたい内容を事前に整理し、組み立てたりする必要がある。

自分の考えを英語で表現するためには、相手に伝わるように、知識や技能を身に付けなければならない。学習すべき語彙や文法は、言語活動の中で思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて理解が深まり、身につけられるものと考える。

（３）「単位時間と単元における『教えて考えさせる』活動構成」とは

東京大学大学院教授の市川伸一氏【図１】のようなモデルに構成される「教えて考えさせる授業」のを提唱している。基礎的・基本的な知識や技能を身に付ける「習得サイクル」と、自らのテーマに沿って問題を追究する「探究サイクル」をバランスよく組み合わせることで、基礎・基本の確実な定着と問題解決能力としての思考力・判断力・表現力を育成し、確かな学力の育成をめざすものである。



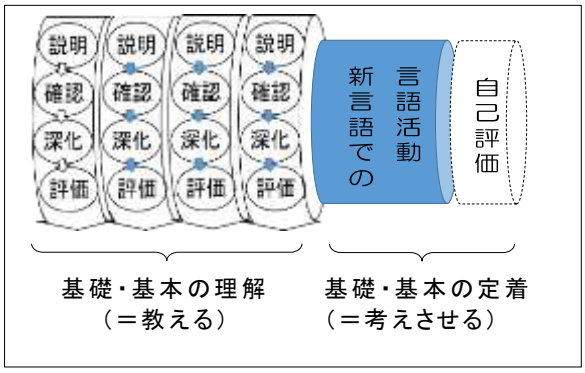
【図１:習得サイクルと探求サイクル】

市川氏は、「教えて考えさせる授業」は次の４つの過程で構成するとしている。

① 予習、予習内容の確認、教師による説明により、基礎的な知識や技能の定着を図る。《内容説明》
② 「思考・判断・表現」の場面を設け、個々の理解の様子を確認し、明確にする。《理解確認》
③ 学習事項を活用し、発展的な課題を解決することで、学習内容の本質をとらえ、理解の深化を狙う。《理解深化》
④ 「何がどのように、どの段階まで理解できたか、またできなかったのか」等、理解度を評価する場面を設定し、生徒の認識する力を育て、授業者がその後の授業展開に役立てる。《自己評価》

本研究では、市川氏の「教えて考えさせる授業」をもとに、単位時間の学習活動と、単元の学習活動とを区別して構成する。単位時間の「教えて考えさせる」授業とは、単

位時間を「説明」「確認」「深化」「評価」の４つの学習過程で構成し、基礎・基本の理解を深めていく。また、「教えて考えさせる」単元構成とは、この「教えて考えさせる」授業を、単元の「教える」活動として、また、新言語材料を用いた言語活動を「考えさせる」活動と位置付け、単元全体を構成していくものとする。【図２】単位時間と単元の２つの「教えて考えさせる」活動構成を組み合わせることで、基礎・基本の定着と表現する能力を高めていきたいと考えた。



【図２:「教えて考えさせる」活動構成】

３　研究の目標

中学校第２学年英語科学習指導において、単位時間と単元における「教えて考えさせる」活動構成を位置づけて文法指導を行うことで、生徒の文法への理解を深め、表現する能力を育てることができるかを究明していく。

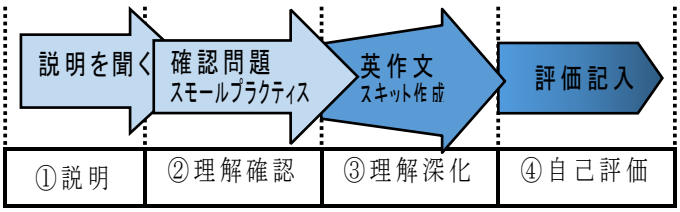
４　研究の仮説

中学校第２学年英語科学習指導において、単位時間と単元における「教えて考えさせる」活動構成を通して文法指導を行えば、生徒の文法への理解を深め、表現する能力を身に付けさせることができるであろう。

５　研究の構想

（１）「教えて考えさせる」授業について

各単元で「文法」や「語彙」を確実に身に付け、表現する能力を育てるために、単位時間の学習活動を次の４つの活動と内容で構成する。【図３】



【図３:単位時間の「教えて考えさせる」活動構成】

①「(教師の)説明」‥‥その１時間で身につけるべき内容について教師の説明を聞く。

②「理解確認」‥‥確認問題やパターンプラクティスでの口頭練習、またはスモールプラクティス（ペア、グループでの交流活動）を行う。

③「理解深化」‥‥ペア、グループでの対話活動、インタビュー活動、英作文、スキット作成等の言語活動を行う。

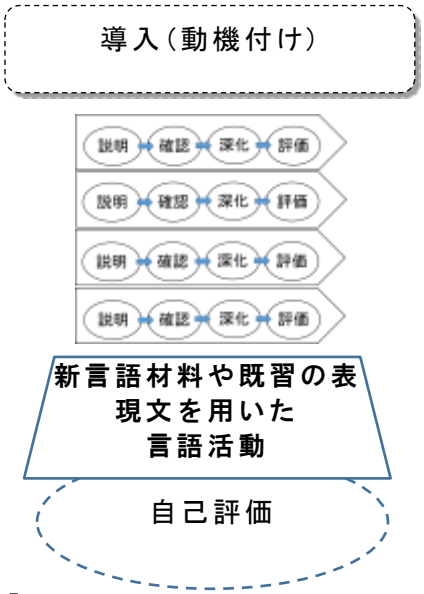
④「自己評価」‥‥自分自身の学習を振り返り、分かったこと、分からなかったことを明らかにする。

この活動構成では、まず、「教師の説明」「確認問題またはスモールプラクティス」で、その時間に学習させたい「語彙」と「文法」を身につけさせる。この時点では、生徒は場面や目的に応じて連語や慣用表現、文法事項を用いながら英作文やスキット作成等の言語活動を行うため、連語や慣用表現の用い方や文法を身につけ、活用できるようになると考える。

（２）「教えて考えさせる」単元について

先に述べたように、「情報を整理しながら自分の考えなどを形成する能力」と「自分の考えを英語で表現する能力」とを高めるためには、より具体的な場面の中で目的や場面、状況などに応じて、「何を」「どのように」相手に伝えればいいのか考えさせなければならない。そのために、「教えて考えさせる」単元においても、「教えて考えさせる」授業で身に付けた文法や語彙を使って、情報を整理しながら言語活動を仕組む。生徒は、相手に伝わるように、既習の文法や語彙を用いて、どのように伝えればいいのかを考えることになるため、単元で身に付けるべき内容を確実に身につけるとともに、表現する能力が高まると考えた。

このように、知識・技能の習得の段階の各時間を、「教えて考えさせる」授業で構成し、その活動を行った後に学習した文法や語彙を用いた言語活動を、「教えて考えさせる」単元の中に位置づけていくこととする。【図４】



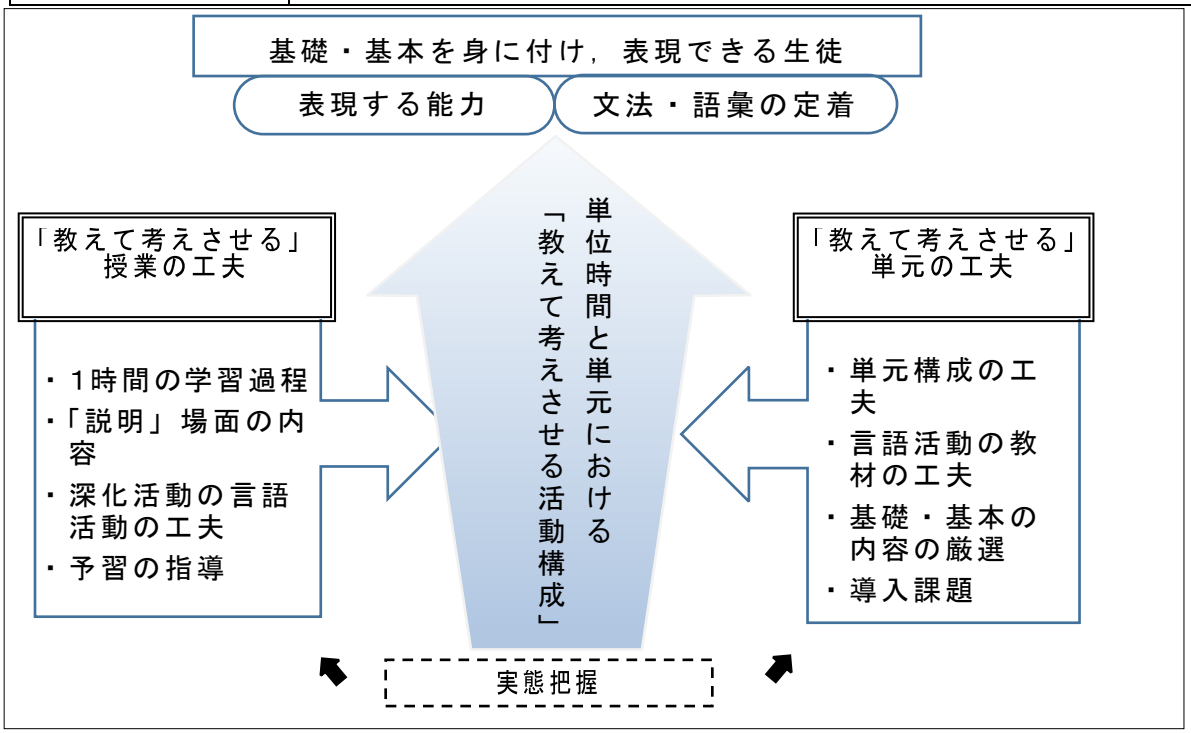
【図４：
単元の「教えて考えさせる」活動構成】

【単位時間の学習活動】

「教える」	●教師からの説明 ●確認問題やパターンプラクティスでの口頭練習
「考えさせる」	●言語活動（インタビュー活動や英作文、スキット作成など） ●自分自身の学習を振り返り

【単元の学習活動】

「教える」	●新言語材料の定着 〔単位時間の「教えて考えさせる」活動〕
「考えさせる」	●言語活動（相手意識を持たせた手紙や紹介文の作成や交流） ●自分自身の学習の振り返り



６　検証の内容と方法

	検証内容	検証方法	評価基準	
項目①	基礎・基本となる「語彙」および「文法」を身に付けることができたか。	・評価テスト ・単元テスト	A	基礎・基本の問題の正答率が80％以上である。
			B	基礎・基本の問題の正答率が50％以上である。
			C	基礎・基本の問題の正答率が49％以下である。
項目②	目的や場面に応じて、自己表現文を書くことができたか。	・学習プリント分析 ・自己評価分析	A	新言語材料を３つ以上使って、英文を正しく書ける。
			B	新言語材料を２つ以上使って、英文を正しく書ける。
			C	新言語材料にエラーがある。もしくは新言語材料を使えていない。

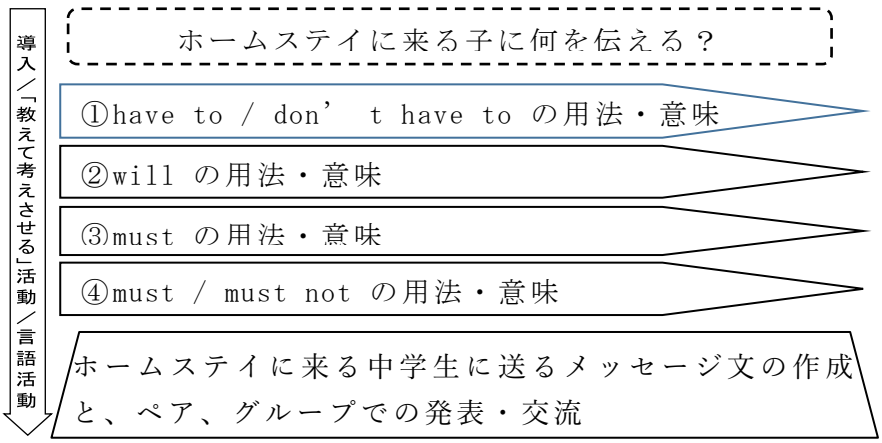
７　研究の実際

（１）実践１

〈単元目標〉ホームステイに来る外国の中学生にメッセージを送ろう

【導入】

導入の段階においては､日本でホームステイする中学生が安心してホームステイできるようなメッセージを作成するという活動に対して興味･関心を高め､その内容や表現について明確にしていくことをねらいとした。



まず、単元全体の学習に対する興味・関心を高めるために、ホームステイについての教師の話や資料を通して、ホームステイについて知る場面を設定した。次に、課題意識を持たせるために、「知り合いの中学生がホームステイに来るから､アドバイスをしてほしい」という ALT の VTR を提示し、伝えたいアドバイス等の内容について、日本語で考える場面を設定した。伝える相手を意識させることで、生徒は何を伝えたいかを活発に話し合う様子が見られた。

【「教えて考えさせる」授業】

助動詞を中心とした新言語材料を身に付けさせ､それらを活用してホームステイに来る外国の中学生にメッセージを書く力をつけたいと考えた。そのために、次の４時間の「教えて考えさせる」授業を構成した。

	説明	理解確認	理解深化
１時	○have to / don’t have to の用法・意味	・パターンプラクティスで口頭練習 ・確認問題	・have to / don’t have to を用いた外国の習慣についてペアで会話

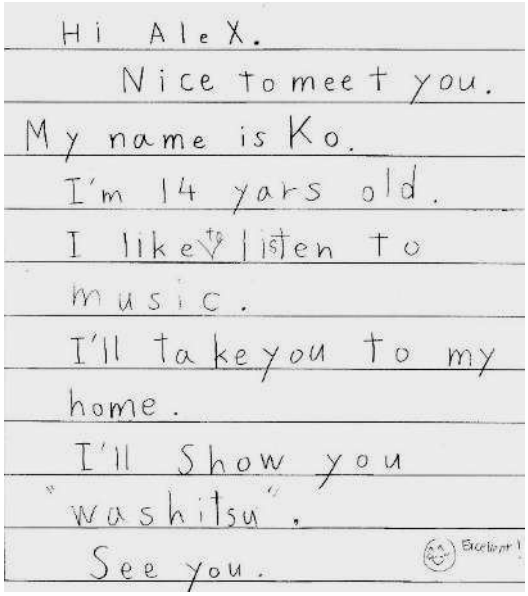
2時	○will の用法・意味	・パターンプラクティスで口頭練習 ・ある人物の予定について、ペアで説明	・will を用いた留学生を案内したい場所したい場所についての英作文
3時	○must の用法・意味	・パターンプラクティス ・確認問題	・must を用いた日本の生活習慣についての説明文
4時	○must / must not の用法・意味	・パターンプラクティスで口頭練習 ・確認問題	・さまざまな標識やマークについてペアで会話

４時間目においては、授業の概略と疑問点を明らかにするために、事前に予習課題に取り組ませておき、授業の導入において、予習の確認を行った。説明段階で must の復習を十分に行い、must / must not の意味と用法について説明した。理解確認段階では、多くの英文に触れるためにピクチャーカードを用いながら、パターンプラクティスでの口頭練習を多く取り入れ、確認問題を解き、ペアで確認する場面を設けた。理解深化段階では、日本の生活でよく見かける標識やマークなどをペアで説明する活動を行った。理解確認段階において多くの例文に触れていたのでこの活動をスムーズに取り組めたペアが多かった。【写真 1】その後、説明した内容を”We must not eat here. ”のように英文で書かせて、単元のまとめで行う伝後活動のための英文を蓄積した。さらに、自己評価段階では、must / must not を使って「これから気を付けていきたいこと」について自己表現文を書かせることで、新言語材料の定着を図った。

【写真１:ペアで説明している場面】

【言語活動】

単元のまとめとしての言語活動では、学んだ表現や語彙を用いて、日本でホームステイする外国からの中学生が、安心して過ごせるようなメッセージを書き、グループで交流することをねらいとした。ここでは、本単元で学習した新言語材料を確認した後、日本の生活についての紹介やアドバイスする内容について、ペアで考える場面を設定した。適切な表現を用いて、生徒は伝えたい内容を英文で書き、まとまりのあるメッセージを作成することができていた。ある生徒は、新言語材料を用いて用いた英文を２文書くことができていた。【図５】さらに、ペアで作成したメッセージをグループ内で発表する場面を設定した。

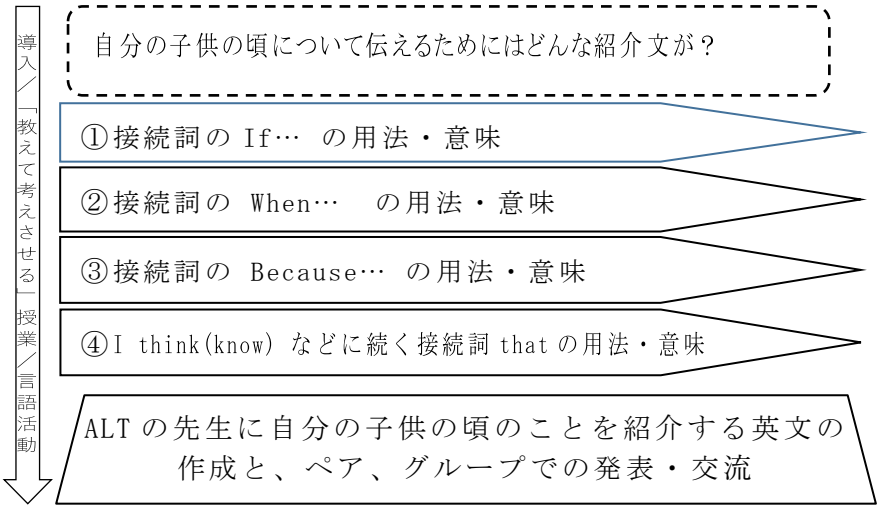


Hi AleX.
Nice to meet you.
My name is Ko.
I'm 14 yars old.
I like listen to
music.
I'll take you to my
home.
I'll Show you
"washitsu".
See you.
Excellent!

【図５：生徒が書いた英文】

（２）実践２

〈単元目標〉ALT の先生に自分の子供の頃のことを紹介しよう。



【導入】

本単元の学習内容や見通しを持ち、自分の子供の頃について、ALT の先生に伝える内容のイメージを持つことを目標とした。自分の子供の頃についての英文を作成し、ALT に伝えるという活動に対する興味・関心を高め、その内容や課題を明らかにすることをねらいとした。単元の導入では、ALT が書いた自分の子供の頃についての英文を紹介し最後に ALT から子供の頃について教えてほしいというメッセージを伝え、相手意識を持った表現活動ができるように仕組んだ。その後、自分の子供の頃について伝えたい内容を日本語で考えさせメモし、英文の内容についてのイメージを持たせた。

【「教えて考えさせる」授業】

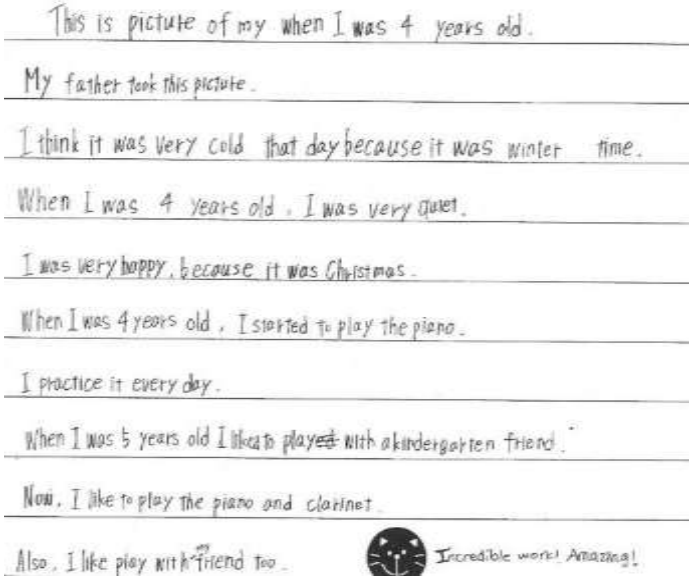
接続詞を中心とした新言語材料を身に付けさせ、それらを活用して自分の子供の頃についての紹介文を書く力をつけたいと考えた。そのために、次の４時間の「教えて考えさせる」授業を構成した。

	説明	理解確認	理解深化
1時	・接続詞の If… の用法・意味	・接続詞の If…を用いたカルタ ・接続詞 If…の決まりをペアで確認	・「雨の場合、運動会はありません」等の表現を説明
2時	・接続詞の When…の用法・意味	・パターンプラクティスで口頭練習 ・確認問題	・接続詞 When を用いた自分史作成
3時	・接続詞 Because…の用法・意味	・パターンプラクティスで口頭練習 ・確認問題	・接続詞 Because を用いた自分の子供の頃についての英作文
4時	・I think(know)…などに続く接続詞 that の用法・意味	・絵と単語を参考に、絵の中の人物が考えていることや知っていることを説明	・接続詞 that を用いた自分の子供の頃についての英作文

２時間目においては、ALT と JTE のモデル文を参考に、自分史を書くことをねらいとした。授業の概略と疑問点を明らかにするために、事前に予習課題に取り組ませて、授業の導入において、予習の確認を行った。説明段階では、接続詞 when のポイントを確認し、ALT と JTE のモデル文を提示した。理解確認段階では、多くの英文に触れるために、フラッシュカードを用いてパターンプラクティスを行い、基本文の定着を図ったあと、確認問題で理解を確認した。さらに、理解深化段階では、接続詞 when を用いて自分の子供の頃についての英文を書き、ペアでお互いの英文を紹介する場面を設けた。

【言語活動】

これまで単元を通して身につけた表現や語彙を用いて、ALT に自分の子供の頃について紹介する英文を書いて表現することをねらいとした。まず、単元の導入で用いた ALT の英文を再度提示し、自分の子供の頃についての紹介文にふさわしい構成、内容、表現について考えさせ、全体で確認する場面を設けた。次に、自分の子供の頃についての紹介文を５文以上の英文で書き、ペアで発表する場面を設けた。紹介文の構成を理解し、また、これまで「教えて考えさせる」授業で蓄積してきた英文を使うこともできるので、積極的に活動に取り組む生徒の姿が多く見られた。生徒は、単元の新言語材料を３つ以上用いて【図６】、自分の子供の頃についての英文を書くことができていた。また、「教えて考えさせる」授業で作成した英文を３文引用していた。

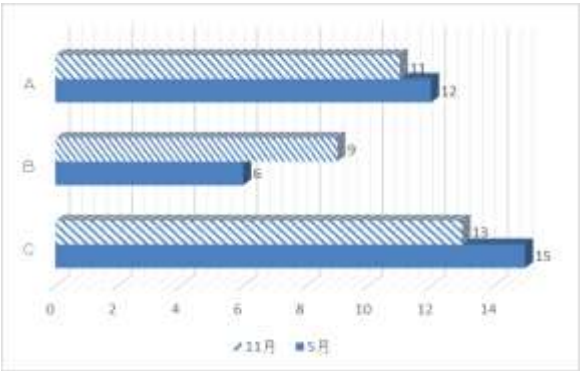

This is picture of my when I was 4 years old.
My father took this picture.
I think it was very cold that day because it was winter time.
When I was 4 years old, I was very quiet.
I was very happy, because it was Christmas.
When I was 4 years old, I started to play the piano.
I practice it every day.
When I was 5 years old I like to played with a kindergarten friend.
Now, I like to play the piano and clarinet.
Also, I like play with friend too.
Incredible work! Amazing!

【図６：生徒が書いた紹介文】

（３）実証授業の結果と考察

検証内容１：基礎・基本となる「語彙」および「文法」を身に付けることができたか。

評価テストと単元テストにおける基礎・基本の問題の正答率をみると、B の生徒が 6 人から 9 人へ増加した。また、C の生徒が 15 人から 13 人に減少した【図７】。これは、単位時間と単元における「教えて考えさせる」活動構成の中で思考・判断・表現を繰り返すことを通じて理解が深まり、基礎・基本となる語彙および文法を身に付けられたものと考える。

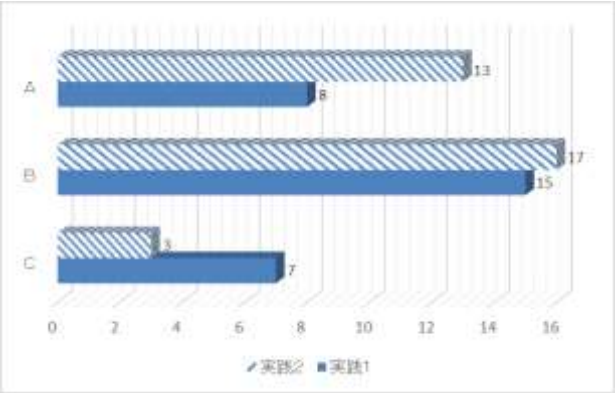


【図７】5 月（実践前）と 11 月（実践後）のテストの正答率の比較

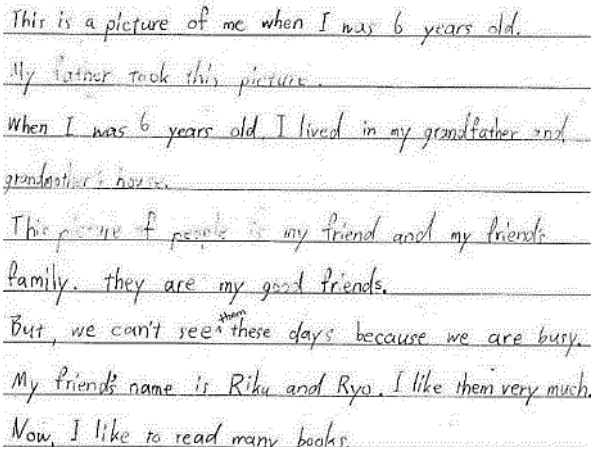
検証内容２：目的や場面に応じて自己表現文を書くことができたか。

単元の言語活動で書いた自己表現文の分析によると、実践１では A の生徒が８人、B の生徒が 15 人であった。さらに、実践２では A の生徒が 13 人、B の生徒が 17 人であった。【図８】特に C の生徒については、実践１では７人であったが、実践２では３人と半減した。これは、単元の活動構成において、「教えて考えさせる」授業で身に付けた文法や語彙を使って言語活動を仕組み、生徒が相手に伝わるために、既習の「文

法」や「語彙」を用いて、どのように伝えればいいのかを考えることになるので、単元で身に付けるべき内容を確実に身につけるとともに、それらを活用して表現する能力が高まったものと考えられる。特に、実践２においては、モデル文単元の導入や単位時間の言語活動の中で複数回提示したため、新言語材料の意味や使い方が定着したと考えられる。また、実践１と実践２後の学習プリントを見ると、目的や場面に応じた表現を使って自己表現文を作成することができていた生徒が増えていた。【図９】単元の言語活動において、活動に入る前に手紙や紹介文の構成を確認することで、新言語材料の目的に応じた使い方が定着したと考えられる。



実践１と実践２における【図８】英作文の評価の比較


This is a picture of me when I was 6 years old.
My father took this picture.
When I was 6 years old, I lived in my grandfather and grandmother's house.
This picture of people is my friend and my friend's family. they are my good friends.
But, we can't see them these days because we are busy.
My friend's name is Riku and Ryo. I like them very much.
Now, I like to read many books.

【図９】生徒が書いた英作文

８　研究の成果と課題

○　単位時間と単元における「教えて考えさせる」活動構成において、思考・判断・表現を繰り返すことを通じて理解が深まり、基礎・基本となる語彙および文法を身に付けられた。

○　単位時間の「教えて考えさせる」授業で身に付けた文法や語彙を使って言語活動を仕組み、単元のまとめにつなげていったことは、生徒の表現する意欲や能力を高めることにつながった。

●　単位時間の「教えて考えさせる」授業では、時間が足りなかったため、授業のまとめや自己評価の時間が十分に確保できなかった。

●　英作文の活動において、付加修正の仕方を工夫する必要がある。

《参考文献》

市川伸一　「教えて考えさせる授業」を創る　図書文化社　2008 年６月
市川伸一　教えて考えさせる授業　中学校　図書文化社　2012 年４月
中学校学習指導要領解説　外国語編　2008 年　文部科学省

《引用文献》

「幼稚園・小学校・中学校・高等学校・及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」中央教育審議会答申 p 194　2016 年 12 月